

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	モリエールにおける《nature, bon sens, raison》：モンテーニュ, デカルトとの関連を中心に
Author(s)	三木, 島彦
Citation	フランス文学, 17 : 1 - 9
Issue Date	1989-05-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040964
Right	
Relation	



モリエールにおける〈nature, bon sens, raison〉

— モンテーニュ、デカルトとの関連を中心に —

三 木 島 彦

モリエールの喜劇は、極端に走った人間の滑稽さを舞台上で演じてみせ、人々を笑わせながら風俗を懲戒することを目的としている。観客の中にはいわゆる才人、学者などもいる。しかし実際はさほど教養のない民衆が絶対多数を占めていた。したがって、モリエールの喜劇に含まれている哲学と言えそうなものも特に高度な専門的な内容ではない。一般の人々にとって、十分説得力のある分かりやすい議論であった。それは誰にも自然に備わっている良識に訴えかけるものである。良識に照らしてこれこれの欠点はおかしい、人間の自然にそぐわない。これがモリエールの議論である¹⁾。

モリエールはイエズス会の学校でユマニスムの教養を身につけ、さらに大学で法学も修めた知識人である。その彼は喜劇作家という自分の天職以外にどんな思想の党派にも属していない。主義者として規定されない。彼の喜劇の中には、様々な思想の混淆が見られ、そうしたものが喜劇作家としての職務という1つの方向によってまとめられている。そこにモリエールの「自然」nature, 「良識」bon sens, 「理性」raison を検討してみる意義があると思われる。

1. 医学批判

それではまずモリエールの「思想」借用の例として医学批判の論法を取り上げることから始めたい。この問題を通じてモリエールの自然なるものへの信頼が実に明解に説明されているからである。病気になった時どうするか。『病は気から』の中でモリエールは彼の代弁者である作中人物ベラルドに語らせている。

なにもしません。じっと安静にしているだけでいいのです。自然に対してなすがままにさせておけば、それが落ち込んだ身体の不調からも、それ自身でゆっくりと回復してゆきます。全てを台無しにするのは私たちの不安や私たちのいらだちなのです。そして、殆ど全てといってよい人間が彼らの病気ではなく、薬によって死ぬのです²⁾。

芝居の中で、自分を重病人だと思い込んでいる滑稽な人物アルガンが登場する。つまり、

彼に対して無制限に投与される薬や、洗腸や刺絡などの治療がかえって自然の秩序を破壊し、健康な人を病人にしてしまうというのである。

これはモンテーニュの『エッセー』第2巻第37章に見られる論法である。モンテーニュはさまざま、この問題を精神的な次元、一般的な学問や理性の問題に押し広げる。モリエールも同じ道を歩んでいる。「自然に従うこと」、それは古代のエピクテトス、マルクス・アウレリウスらストア主義の賢者の共通の態度であった。この場合、自然とは人間の本性、その人の持ち前を意味している。モンテーニュはこう言っている。

私は自分のためには、「自然に従えば間違いがない。最高の掟は自然に合致することだ」という昔の教訓をきわめて単純にそのままに受け取ってきた。…理性の力で私の生れつきの性格を直さなかったし、技巧によっていささかも自分の傾向を乱さなかった³⁾。

この部分で、モンテーニュは、自分は理性という、いわば人為的なもので自分の持って生まれた自然の傾向—本性を矯正しようとは思わないと述べている。17世紀の古典主義の思想の流れの中に生きた人々にとっても、自然とは古代のストア主義者たちと同様、人間の生まれながらの本性、いわば人間的眞実といったものを指している。そして古典主義の理論家、作家たちにとっては、この自然こそ理性と呼ぶに相応しいものであったのである。

例えば、デカルトにおいても、理性とは「自然の光」*lumière naturelle* であり、従って「自然に従うことは理性に従うこと」である。また、モリエールが「単純な自然の良識」*simple bon sens naturel* と呼んだ精神の働きも同様のことを意味している（『女房学校批判』第6景のドラントの台詞）。彼の性格喜劇における「人間的眞実の描写」*peinture de l'humaine vérité* とは、そうした自然の光を具体的に形に表わしたものと言える。

モリエールの初期作品『うるさ方』の上演を見たラ・フォンテーヌは、そこに後年の大喜劇を生み出す芸術の萌芽を認めてこう評している。

今や一步も自然を離れてはいけない⁴⁾。

モリエールの親友であり、熱烈な支持者であったボワローは、彼の『詩学』の中でこう述べている。

理性を愛しなさい。あなたの作品はつねに理性のみから、その輝きと価値とを受け取るように⁵⁾。

ボワローは自然と理性の語を併用しており、全く区別していない。彼においても、理性とは人間が生まれながらに備えている良識、つまり自然の光を意味している。

モンテーニュにおける自然と理性の対立も結局は人為に対して人間の本性を称揚したという点で、古典主義の理論である自然、すなわち良識、すなわち理性と同じ考えを表明しているのだと言える。モンテーニュは、不自然で、人を欺く、学問と称する偽科学を理性と呼んだにすぎない。

モリエールのペラルドの次の台詞もそうした趣旨に基づいている。彼はアルガンの主治医ピュルゴン氏を「頭从天辺から足の先までお医者さんといった人間」homme tout médecin, depuis la tête jusqu'aux piedsだと評して次の様に言っている。

あの人にとって医学にはあいまいなことは何ともありません。疑わしいこと、困難な問題など何ともありません。猛烈な偏見、凝り固まった信念、乱暴な常識や理性でもって、滅茶苦茶に下剤をかけたり、血を抜いたりで、何事も注意深く、じっくり考えてみるということがありません。あの人があなたに何をしようと悪く思っちゃいけません。あなたを殺してしまうのもこれ以上ない善意からなんです⁶⁾。

実際、この当時、デカルトの『情念論』や『病は気から』の医師ディアフォワリュス氏の言に見られる通り、ハーヴェイの血液循環説の是非をめぐる議論があった。それほど医学は未熟で、人間の身体は未知の領域であった。ここで告発されているのは、自然の神秘を神秘として受け入れようとしない人間の傲慢さに他ならない。こうした傲慢が人間にしばしば過誤を犯させるのである。人間は誤まちやすいもの、その点で自己の理性の限界を自覚しなければならない。この思いがモンテーニュの寛容思想につながっている。

私は、われわれの精神や学問や技術が考え出したものに対しては不信をいただいている。われわれはそれの肩を持つあまり、自然と自然の掟を捨て去って、節度と限度を守ることができなくなっている⁷⁾。

モンテーニュの態度を受け継ぎ、モリエールの性格喜劇もまた、極端を避け、中庸を守ることを説く喜劇である。

2. 人間の理想像

人間性陶冶を目的とするユマニズムの思想は、当然教育論に触れる面を持っている。モリエールにおいても、頭从天辺から足の先まで医者でしかありえないディアフォワリュス氏の息子トーマの問題がある。彼はその受けた教育のため、出来合いの知識を無批判にがぶ飲みし、それを人前で再生するだけの頭しか持ち合わせていない。若い娘を芝居ではなく、解剖実習に招待しようとして大いにギャラントリーを発揮するトーマは、その場その場の状況に応じて判断してゆく精神の柔軟性を持ち合わせていない。

『亭主学校』『女房学校』においても、寛容さを欠き厳格な規範を押しつけるだけの教育が自然によって復讐されるテーマが扱われている。その意味は人間性に対する圧制を空しいものにする自然の善性の称揚である。

この教育論の問題については、『エッセー』第1巻第26章「子供の教育について」の中で、自然思想の立場からの人間完成の理想が述べられている。

さてわれわれはここではこれと反対に、文法学者や論理学者を仕立てることではなく、ジャンティヨムを仕立てることを目的としているのですから…⁸⁾

モンテーニュにとって求められるのは型にはまらない、自由な思考のできる人間、単純で自然な良識の持主であり、そうした生まれつきの良さを備えた人間である。奴隷ではなく、自由人、高邁な心の涵養こそ教育に求められた。「生まれの良さ」*bonne naissance* とはこの様に広い意味に解されるべきであり、生まれつき高邁さを持たない者は、たとえ公爵の息子でも密かにくびり殺してしまうか、どこかの町の菓子屋の小僧に出してしまえと言っている。

この意味での生まれの良さについては、デカルトが『情念論』でも言及している。「高邁さ」を説明するために、*magnanimité* という語の代わりに、語源的に「生まれの良さ」の意を含む *générosité* を用いている。モンテーニュの次の言葉を見てみよう。

人はよく「自然の恵みの中でもっとも公平に与えられたものは分別である」という。なぜなら、自然から分別を与えられたことに満足していない者はないからである⁹⁾。

(分別：sens)

デカルトは、『方法序説』の書き出しの部分を全くこのモンテーニュの文章に負っている。この分別、すなわち判断力は、言うなれば真なるものと偽なるものを分かつ能力であり、また善と悪とを弁別しうる能力である。そしてこうした善き意志—自由意志は誰にも与えられているのであり、それを良く用いることは誰にもできるはずなのである。

このようにデカルトの「良識人」*homme de bon sens* とは、モンテーニュのジャンティヨムにあたる。書物による学問よりも求められるのは、この良識人によってなされる単純な推理、換言すれば神によって人間に与えられた真と偽を分かつ光のようなものである。デカルトにとっての「高邁な人々」*généreux* とは、彼の思い描いた人間のあるべき姿である。生まれの良い人々とは、良識人であり、17世紀に理想の人間像として考えられたオネットムの彼なりの解釈に他ならない。

ジャンティヨムについてはまた、パスカルが『パンセ』の中でモンテーニュの言葉をほぼ繰り返す形で、彼のオネットムの定義を行なっていることはよく知られている。彼は専門や職業の名で呼ばれることを嫌い、単にオネットムと呼ばれたいと述べている¹⁰⁾。引き合いに出

されているのが「数学者」というあたりに彼の個人的体験を感じさせる。

パスカルは「繊細の精神」という立場から、一時社交界において人を喜ばせるあらゆる特質を備えた人間たらんことを目指した。人に対して心地好いもの *agréable* であると感じさせるものは良き趣味 *bon goût* であり、それを備えた人格がオネットムである。『パンセ』の他の断章に「詩人であってオネットムではない」¹¹⁾とある。これは先のモンテーニュにならった全人的な人格の希求という意味もある。さらには詩のような芸術作品もその作る人のパーソナリティの反映したものでなければ何の価値もないという主張でもありえよう。

事実、ボワローは述べている。

詩をもって諸君の永遠の職能とはしないやうに。友人との交りを厚くせよ。誠實の人たらんことを心懸けよ。著作中でのみ快適な、魅惑的な風をしてみたところで駄目である。會談の術や處世の術を心得ねばならない¹²⁾。(快適な：*agréable*)

真・善・美一体を説くボワローは、『詩学』の中でたびたび「理性」「自然」の語を用いている。彼において人格における良き趣味は作品における良き趣味に結びつき、芸術における自然は、人格的な面で「自然に従うこと」と無関係でないことは明らかであろう。

3. 芸術論

このような古典主義の理論に基づく芸術論、作品製作上の心得は、モリエールの『女房学校批判』『ヴェルサイユ即興』の中でも語られている。両作品の形式は喜劇『女房学校』に関して敵たちの行なった批判に対する回答である。

モリエールは、喜劇の意図は個人攻撃にあるのではなく、風俗、こう言ってよければ当代の一般的な性格を描くことにある旨、強調している。特定の誰彼れを攻撃しているのではないと述べ、この後の喜劇における戦いで自らが嘲笑されたと思って憤る人たちに対し、芸術上の面からも予防線を張っているのである。彼の喜劇は普遍的に認められる人間の欠点を対照としている。たとえ喜劇の中に描かれた性格に自分の姿を認めたとしても、それはむしろ当たり前のことであり、怒ってはいけない。もし作者に対して敵意を抱くとすれば、その人は二重の過ちを犯すことになる。

この論法はすでに、ユマニストの代表であるエラスムスが『痴愚神札讃』の冒頭のトマス・モーアへの献辞の中で用いている。

特に誰といふ名を擧げて特定の人間を攻撃はせずに、人間といふものの習俗を批判するのは、ほんたうに噛みつくことになるのでせうか？ これは、むしろ、教へ諭し忠言を與へることではないでせうか？ その上、私は、絶えず自己を批判してゐるではありませんか？ 人生のいかなる種類のものをも除外しないやうな諷刺は、殊更に或る特定

の人間に喰つてかゝるやうなものではなく、むしろあらゆる人間の悪徳を槍玉にあげるものなのです。ですから、もし誰かが、立ちあがつて、やられた！ と叫ぶ場合には、以上のやうな訣合ひから、その人は自ら脛に傷があることを認めることになり、或は少くとも、不安になつたことを告白することにもなるのです¹³⁾。

モリエールは、『女房学校批判』第6景で誠実な女性ユラニーにこの言葉を繰り返させている。この後、『タルチュフ』においても宗教関係者の非難に対して、「喜劇の任務が人間の悪徳を矯正することにある以上、私はどんな理由でそれを免れる特権的な人間があるのか、理解できぬ」と述べ、人々の理解を求めている。その上で自分の喜劇という仕事の意義をこう説明している。

我々は芝居が悪徳を矯正するに多大の効果を持つことはすでに知っている。真面目な道徳の最も見事な言葉による表現も、たいていの場合諷刺という表現より無力である。そして大部分の人間たちにとって、その欠点を描写することほど彼らの過ちをよりよく非難する方法はない。それを明るみにして世の人々の物笑いの種にするほど悪徳に対する大いなる打撃はない。人間は非難に耐えるのは容易だが、嘲笑には全く我慢ならぬものである。邪悪であることに同意はできても、滑稽なものになることは全く嫌うものだ¹⁴⁾。

今日、ベルグソンも『笑い』の中で、笑いの目的は矯正にあり、なるべく一度に多数の人間に痛いところを突かれたと思わせれば有効である、だから喜劇作家の観察も本能的に一般的なものに向かうのだと述べている。

風俗を懲戒するために、喜劇作家は日常生活から採取してきたいくつかのタイプを舞台にかけなければならない。モリエールは、その点で喜劇の価値が悲劇に劣るものではないと主張する。

私は偉大な感情を荘重な文体で表し、韻文で逆境に立ち向かい、運命を責め、神々をののしめることは、適切に人間の滑稽の中に入り込み、世の人々の欠点を舞台に心地よく表現することにくらべればずっとやさしいと思うのです。あなたが英雄を描く時、あなたはお好きなようになさればよろしい。…けれども人間を描く時は自然に従って描かなければなりません。そうした肖像は似ていることが望まれるのです。そして、もしあなたが現代の人々をそこに認めないのであれば何にもなりません。一言で言って厳肅な芝居では非難されないためには良識的で良く書けていればそれで十分なのです。けれどもそれ以外の芝居では十分とは言えません。そこでは戯れなければならないのです。オネットムを笑わせるのは並々ならぬ企てなのです¹⁵⁾。

悲劇であれば、それは人間の中にある情念を抽出し、これを荘重な文体で表現して、観客の同情や、恐怖、憐憫をあおればよい。ところが喜劇では、むしろそうした感情移入を拒否して、笑わせることによって観客に教訓をたねなければならない。

このことは自己自身に対する客観視であり、同時に謙遜でありたいという人々の欲求に奉仕するものである。なぜならエラスムも言っているように、諷刺を行う者は、絶えず自己を批判しているからである。

だが、当然こうした、風俗を懲戒するという態度には論争が生ずる。つまり、喜劇は論争を舞台に上す仕事でもある。この戦いにおいて、モリエールはオネットム＝教養ある紳士に対して呼びかけているのであり、そこに「オネットムを笑わせるのは並々ならぬ企てである」との言葉が生まれる。またこう言ってよければ、作者は世に行われる極端に対し、観客一人一人の中にある素直な心に呼びかけたいと思っているのである。

4. ま と め

その意味でデカルトが『情念論』の中で述べている次の言葉は、示唆に富んでいる。

上品な「からかい」は、悪徳を笑うべきものと見えしめることによって有効に懲らしめるのであり、しかし、その際、みずからはそれを嘲笑せず、かつ、だれにも憎みを示さないでそうするのである。これは一つの情念ではなくて、紳士の美質である¹⁶⁾。

(上品な「からかい」: *raillerie modeste* 紳士: *honnête homme*)

『タルチュフ』において、モリエールの代弁者クレアントは、こちこちの信者で極端に走った滑稽な人物オルゴンに対して、自らをこう説明している。

私は人から尊敬される学者ではありませんし、知識があると言えるほどものを知ってはいません。けれども、ひとことで言って、私の学問の全てと云えば、本物と偽物を見分けることができることです。私はどんな英雄といっても立派な信者ほど尊敬すべき人は知りませんし、真の熱情から発する清らかな信仰心ほど高貴で美しいものは知りません¹⁷⁾。

この言葉には、オネットムの本質をめぐる1つの定義が表れている。実際、良識とは真なるものと偽なるものを見分ける能力に他ならない。ユマニズムの流れに位置し、17世紀のモラリストたちの論は、例えば真の雄弁とは、真の友情とは、真の誠実さとは、といった喋り方をよくする。デカルトやパスカルがそうであるし、ラ・ロシュフーコー、フランソワ・ド・サルの名も挙げるができる。

こうした判断力の問題を通じて言えることは、モンテーニュの言うごとく「いっぱい詰ま

った頭よりよく出来た頭」plutôt la tête bien faite que bien pleineが求められているということである。つまりオネットムとは、書物による知識をたくさんたくわえた学者ではない。クレアントは学を銜う喋り方はしない。落ち着いた物腰、自然な声の調子、オルゴンを説得する時も、彼の中にもあるはずの生まれつきの、良いものを良い、悪いものを悪いとする心情に訴える。

人間のこうした自然の善性をねじまげるとどうなるか。知識の多さが精神の推理を活発に鋭敏にするかわりに、それを鈍磨させ、停滞させ、柔軟性を欠く型にはまった人間を作ってしまう恐れがある。

さかのぼって例を求めてみよう。ラブレーのガルガンチュアは最初銜学者の「妄想阿呆陀羅博士」(渡辺一夫氏による)の教育を長く受けたため、頭は朦朧として、物腰は優雅さや洗練を欠き、人前に出ても驢馬の尻ほどもろくに口も利けない有様、ただおいおいと泣くばかりであった。父王は怒って、この無能な教師を殺そうとするが、取り成す人もいて命を助けてやり、酒を飲ませて追い出すのである。

つまり、学問が人をうすのろにしまうという物語の系譜がある。人間形成に役立つはずの良きものも方法を誤り、その本義を見失うならば、かえって人間をそこなうものになりかねない。銜学者はモリエール以前から様々な形で諷刺の対象とされたのである。これに対し、モリエールが「平土間の客」と呼んだ人々の、むしろ素朴な庶民感情の中に正しい判断力があるとしても不思議はない。

註

- 1) 『女房学校批判』の登場人物ドラントは、上流社会の通人ぶる人間よりもむしろ平土間の客 parterre, 庶民の中にボン・サンス, すなわち判断する力があるとする。 *La Critique de l'Ecole des femmes*, scène V, pp. 653—4, in *Œuvres complètes de Molière*, éd. G. COUTON, Bibl. de La Pléiade, Gallimard, 1976. モリエールの引用は全てこの版による。
- 2) *Le Malade imaginaire*, acte III, 3, p. 1154.
- 3) MONTAIGNE, *Essais*, liv. III, chap. XII, in *Œuvres complètes*, éd. A. THIBAUDET et M. RAT, Bibl. de La Pléiade, 1962, pp. 1036—7. 以下, モンテーニュの引用の訳は全て原二郎氏(岩波文庫)による。
- 4) LA FONTAINE, *Œuvres complètes de Molière I*, éd. R. JOUANNY, Classiques Garnier, 1979, p. 364.
- 5) BOILEAU, *L'Art poétique*, chant I, vv. 37—8, Nouveaux Classiques Larousse, 1972, p. 42.
- 6) *Le Malade imaginaire*, acte III, 3, pp. 1153—4.
- 7) MONTAIGNE, *op. cit.*, liv. II, chap. XXXVII, p. 744.

- 8) *Ibid.*, liv. I, chap. XXVI, p. 168.
- 9) *Ibid.*, liv. II, chap. XVII, p. 641.
- 10) PASCAL, *Pensées et opuscules*, éd. BRUNSCHVICG, Hachette, p. 334.
- 11) *Ibid.*, p. 335.
- 12) BOILEAU, *op. cit.*, chant IV, vv. 121—4, p. 87. 引用の訳は、丸山和馬氏による（『詩學』岩波文庫，昭和9年）。
- 13) エラスムス・渡辺一夫訳『痴愚神札讃』岩波文庫，昭和43年，14～15頁。
- 14) *Préface du Tartuffe*, p. 885.
- 15) *La Critique de l'Ecole des femmes*, scène VI, pp. 660—1.
- 16) DESCARTES, *Les Passions de l'âme*, in *Œuvres choisies II*, éd. L. DIMIER, Classiques Garnier, 1930, p. 97. 引用の訳は、野田又夫氏による（『世界の名著27（デカルト）』中公バックス，昭和53年）。
- 17) *Le Tartuffe*, acte I, 5, vv. 351—8, p. 909.